フライの雑誌
No.55 2001年

釣り場時評――㉞

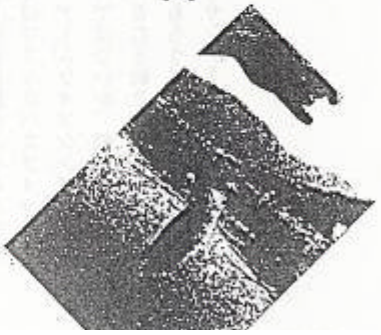
続・外来魚をどう考えるか

「ブラックバス⇩琵琶湖⇩義憤」という流れで私がむらむらしてしまう理由

水口憲哉
みずぐち・けんや／東京水産大学資源経済研究室・教授

面白い人に出会った。一九五六年三重県に生まれ、愛知大学理学部（思想史）、名古屋大学大学院（情報学）を終了後、三重大学水産学部（魚類学）と京都大学理学部（動物生態学）で研究し現在岐阜経済大学で教えている森誠一さんである。森さんの著書「トゲウオのいる川―淡水の生態系を守る」（一九九七年、中公新書）の著者紹介のこの経歴からは想像もつかない、身長一八〇センチ以上、五分刈り、日焼けと漁師そこのけの偉丈夫である。前回の本欄で紹介した、連続講座「ブラックバス問題のすべて」の第四回（九月八日）における話題提供者として「日本の淡水生物相を維持するためには何をすればいいのか」というテーマで森さんと討論の場をもつことができた。

森さんのこの問題への取り組みにおける考え方の基本は、目標（価値基準）をきちんと設定すること、それは問題の所在を明確にすることすなわち何をどうしたいのか、何がどうなればいいのかを明確にすることである。人間ぬきには問題は存在しないし義憤がないとだめだが義憤だけではだめで評価ができないと目標設定も困難である。ということでこれまでの「自然への記憶」を個体から生態系まで確認し、今後は科学として応用生態工学を確立し、これからの「自然への記憶」をどうつくり上げてゆくかが重要だということらしい。義憤「直接自分には関係ないが、道にはずれたことに対して、発するいかり」（岩波国語辞典）などという懐かしくもうれしい言葉に出会うなど森さんの考え方や調査研究結果とその解釈について殆ど異論がなく一時間半の報告を楽しく納得して聞いてしまった。森さんは人間の研究から始まって人間はうそをつきだます、猿もだます、しかし魚はだますこともなく、自分は神様のように魚の全体像を把握できるということで湧水池のトゲウオの社会行動を研究している。筆者は四〇年前金魚の六尾の群れで条件反射の実験を行い、実験結果のもつ意味は実験をする人の何を見たいかという価値基準で決まってしまうという実験の怖さに野外のオイカワの調査に向かい、ついに今となっては人間の問題にすっかり関心が移ってしまった。流れは逆だが関心の振れ幅の大きさは一致していて面白い。だから、日本にブラックバスがいてもいいんじゃないという筆者といてはならないという森さんとの話し合いも結構かみ合うのかもしれない。ただし、森さんが応用生態工学研究会のメンバーであり、「反生態学」にはならない生態学的視点で問題に対応すると言っている点において筆者とだいぶ考えを異にする。まず筆者は河川における近自然工法、生態系の復元、ミチゲーション、ビオトープなどといった言葉を環境破壊の免罪符でもあるかのようにもてあそびさらなる新しい形の環境破壊を進めようとする研究者や開発事業者の集まりである応用生態工学研究会の入会の案内には対応しなかった。それはまた拙著「反生態学」のなかで生態学者としての宍道湖・中海干拓淡水化問題へのかかわり方を徹底的に批判されている現滋賀県立琵琶湖博物館館長川那部浩哉さんが京都大学理学部時代の森さんの指導教官であることとどのように関係しているのだろうか。このあたりのことを含めて、森さんと筆者の考え方のちがいについては、十五年という歳の差、筆者は両親とも東北山形鶴岡の生まれ、これまでの暮らし方生き方などといろいろを考慮して考えなければわかりづらいのかもしれない。

そんなことはさておき川那部浩哉という名前を聞くと、ブラックバス⇩琵琶湖⇩義憤という流れで年がいもなくむらむらしてしまう。なぜそうなるのか。

その一。二月二四日の立教大学におけるブラックバス問題討論会余話。当日進行係の天野礼子さんが、